

中野翠

Midori
Nakano
Kiss Me,
Stupid

生意氣時代



中野翠

Midori Nakano
Kiss Me, Stupid

生意氣
時代



生意気時代 Kiss Me, Stupid

1992年3月20日 第1刷

著 者 中 野 翠

発 行 者 新 井 信

発 行 所 株式 文藝春秋
会社

東京都千代田区紀尾井町3-23

電話 東京(3265)1211

郵便番号 102

印 刷 凸版印刷

製 本 中島製本

©1992 Midori Nakano, Printed in Japan

※定価はカバーに表示してあります。

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします。

ISBN4-16-346300-3

*生意氣時代*目次

I 時のヒト部門 9

奇蹟の顔をもつ男〈ヒートたけしと萩原健一〉 10

『ノルウェイの森』と『されどわれらが日々——』 14

筑紫と鳥越は久米に勝てるか〈「ニュースステーション」攻防戦〉 28

大乃国さまハラハラ日記 41

団塊の世代と昭和天皇 57

Ⅱ 芸能部門 71

今、なぜ歌舞伎なのか？ 72

坂東玉三郎インタビュー 88

イッセー尾形のとまらない男たち 97

喜劇「君の名は」を楽しむ方法 106

「東京ラブストーリー」大論争 中野翠・麻生圭子・横森理香 125

Ⅲ キメツケ御三家登場 145

変形衿の男〈金子郁容・上岡龍太郎・野村秋介〉の巻 146

白ベルトの男〈小沢一郎・堤義明・須藤甚一郎〉の巻 150

定番イノセントの女〈俵万智・アグネス・チャン・菊池桃子〉の巻 154

ナミダ目の男〈美里泰伸・K監督・三浦和義〉の巻 158

不当バツシングの女〈石原真理子・松田聖子・小柳ルミ子〉の巻 162

はるかなるエグゼ男〈波頭亮・四方義朗・ポール牧〉の巻 166

愛されすぎた男〈アーノルド・シュワルツェネッガー・忌野清志郎・美川憲一〉の巻 170

バイリン系ゴージャスの女〈斎藤静奈子・石井苗子・黒柳徹子〉の巻 174

朝日のあたる男〈天野祐吉・高橋源一郎・サトウサンペイ〉の巻 178

ブーケガルニの男〈伊武雅刀・西岡徳馬・萩原流行〉の巻 182

疑惑のギャグ女〈荻野アンナ・三田佳子・酒井法子〉の巻 186

IV 思い出部門 195

中学校教員A、33歳。 196

紙芝居のおじさん、推定年齢43歳。 201

秀才少年M君、15歳。 205

国語教師A、34歳。 209

PR誌編集長S、45歳。 213

雑誌編集者A、33歳。 217

美術教師S、45歳。 221

タタミ屋の子M君、12歳。 225

植木職人Iさん、30代後半。 229

木琴少年ターボー、年齢不詳。 233

塾のせんせいN兄弟、30代。 237

大学院生N君、23歳。①② 241
245

競馬新聞記者T君、23歳。 249

悪い子W君、11歳。 253

Y君、幼なじみ13歳。 257

V 個人部門 261

私が結婚しない理由^{わけ} 262

フェミニズムがわからない 270

イヤな女のダンディズム〈キャサリン・ヘプバーンと森茉莉〉

詩人になるとき

280

あの日に出会う街

283

生涯一家出少女

288

女ともだち

291

あとがき

297

著者自身による解説

299

生意氣時代

Kiss Me, Stupid

本文イラスト
南伸坊
装幀 菊地信義

I 時のヒト部門

奇蹟の顔をもつ男〈ビートたけしと萩原健一〉

ビートたけしの顔は、ほとんど奇蹟と言ってもいいようなものだ。この十年あまりの間にあんなに顔の印象が改良されてしまった人は他にいない。

その昔、「男の顔は履歴書」とか「男は四十過ぎたら顔に責任を持て」という言い方があって、それは確かに正論なのだが、なぜかそういう言い方を好む男にかぎってろくでもない顔をしたりしていることが多いので、まるで説得力がなかった。顔は顔として、外見は外見として語られるべきなのに、それを妙に精神主義的なものにスリカエてしまふ姑息さがイヤだった。しかし、ビートたけしの四十四歳の顔を見ると、「男の顔は履歴書」うんぬんという言い方が、珍しくすんなりと納得できる。素直に正論だと認めることができる。こんな人はめったにいない。

一九八〇年の「マンザイ・ブーム」でツー・ビートの片われとして飛び出して来たときのビー

トたけしは、ハッキリ言つて「小者」の顔だった。落ち着きのない、抜け目のない目つきがほんのちょっとタダモノではない感じを漂わせていたが、全体として見ると巷の雑踏の中にスーッとまぎれ込んでしまうようなありふれた顔だった。それがこの十年あまりの間に、あんなにも魅力的な顔を作りあげてしまった。

彼の顔にはあらゆる矛盾が激しくせめぎあっている。知的でありながら稚氣を失わない、辛辣でありながら暖かみもある、したたかでありながらもろさもたっぷり、強靱でありながら繊細、大胆でありながら度はずれた臆病……。そういう矛盾が独得の不思議に魅力的な顔を作りあげている。

この十年あまりの間にその顔面にはたくさんのシワが刻まれたが、それが老いの哀しさではなく、老いの豊かさを感じさせるところが凄い。ビートたけしの顔を眺めていると、友人の作家・橋本治の言つた「大人になるということは、子どもでなくなることじゃあない。強い子どもになるということなんだ」という言葉を思い出す。ビートたけしの顔は、分別でガードしまくり、自分の生理やエロスを抑圧して生きる「大人の男」の顔ではなくて、ワルガキの心を持ち続けながら、それをうまくコントロールする術を身につけた「強い子ども」の顔だ。新しい「大人」の顔だ。だから、哀しくない。豊かな感じがする。若さやエロスといったものを感じさせる。もう一人、同世代で気になるのは萩原健一だ。

私は七〇年代のTVドラマ「傷だらけの天使」や「前略おふくろ様」のころのショウケン萩原健一が大好きだった。あの時代の、つまり二十代半ばの萩原健一は、まさに若さそのものの、ういういしい躍動感にあふれて輝いていた。おうおうにして八の字形を描く元氣な眉毛や、角ばっ

たアゴなどは、少女マンガ好みの「美形」路線から大きくはずれてはいたものの、そのスッキリとまっすぐな首すじのあたりには、若い潔癖な色気があって、いっぱしの美青年、いや美少年のおもむきがあった。

その彼も今や四十一歳である。中年である。顔にも体にもだいぶ贅肉がついて、若々しい「直線の美」は失われてしまった。

しかし、つい最近、彼の主演した「渋滞」という映画を見ていてつくづく思ったことなのだけれど、萩原健一もまた、老いの哀しさよりも豊かさを感じさせる珍しい男の一人なのだった。とてもいいぐあいにトシを取っている。いい中年の顔になっている。

顔の崩れぐあい、荒れぐあい、くすみぐあいが味わい深い。何というか、「気持のいい生活感」といったようなものを感じさせて、若いころにはなかった別種の魅力で輝いているのだ。ひきあいに出すのはたいへんに心苦しいのだが、このことは沢田研二と比較してみるとよくわかる。ひたすら少女マンガ好みの「美形」路線を突っ走ってきた沢田研二においては、老いは致命的だ。ファンタジック志向の美が、中年化という現実にとんどん侵略されてしまう。贅肉は贅肉のまま、魅力につながらない。

私は沢田研二のファンでもあったので、今の彼の、年齢との格闘ぶりには心が痛む。彼の苦しみは、そのまんまほとんどの女の苦しみだ。世間では「女」と言ったらそれはたいいてい「若い女」を意味してしまうものである。若くなければ「女」じゃあない。若いころは（どんなブスでも）女はチャホヤされるものだが、若さが失われてもなおいっそう別種の魅力で輝き出す女というのは、たいへんに少ない。残念ながら、それが現実だ。沢田研二の苦しみは、ひとごととは思

えない（それでも彼は、このままでは終わらないだろう。いつの日か、そのシワがその贅肉が「シブイ！」と言われるような奇蹟の顔を作りあげてしまう日がやってくるだろう——と元ファンの私は信じている）。

私が惹かれる二人の中年男の顔——ビートたけしも萩原健一も、偶然のようだが、スキヤンダルにまみれて生きてきた男だ。二人とも、スキヤンダルにまみれてきた男にありがちな不潔な匂い、ヨゴレた感じ、濁った雰囲気というのがあんまりない。体の中にしたたかな浄化装置を持っているかのようなのだ。

私はつくづくと思う。男の顔は現実のきびしさの中でみがかれる。きびしさが男を美しくする。「男の顔は履歴書」という言葉は確かに真実だ。その履歴書が魅力的なものになるかどうかは、心の中に浄化装置があるかどうかで決まるのではないだろうか。灰の中からダイヤモンドをつかみ取ってくるような、泥の中に蓮の花を咲かせるような、そういう力があるかどうかで決まるのではないだろうか、と。

男の顔について語るとき、「人間は外見だ。とりあえず目に見えるものを私は信じる」と言うてはばからない私ですら、こんなぐあいに最後は精神論になってしまうのが、不思議のような残念のような。

「FORTY LOVE」一九九一・四

『ノルウェイの森』と『されどわれらが日々——』

村上春樹の小説『ノルウェイの森』（上下巻・講談社）が売れに売れていて、とうとう「ノルウェイ族」「村上春樹現象」という言葉まで生まれるようになった。

「激しくて、物静かで、哀しい、一〇〇パーセントの恋愛小説!!」というキャッチフレーズのこの小説は、一九八七年秋に出版されて以来、版を重ねて、もっか（八八年九月現在）二十三刷上下巻合わせて二百六十七万部を突破し、さらに数字をのばしている。

単行本の世界では十万部を超せば堂々のベストセラーで、七六年の村上龍の『限りなく透明に近いブルー』、八一年の田中康夫の『なんとなく、クリスタル』がミリオンセラーになったことを思い起こしても、（上下巻の分冊ということを考慮しても）この『ノルウェイの森』二百六十七万部という数字の凄さに驚かすにはいられない。